

(別紙2)

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 プルシャ イゴール

Igor Prusa の博士学位申請論文 *Scandal, Ritual and Media in Postwar Japan* (戦後日本におけるスキャンダル、儀礼、メディア) は、人類学的儀礼論、文化社会学、メディア論を基礎にしなが、戦後日本のマスメディアを舞台に生じたスキャンダルについて事例分析し、「有名人」「政治家」「企業」をめぐるスキャンダルがある一定のパターン化された過程をたどることを明らかにした論文である。

第1章でまず著者は、スキャンダルが戦後日本史を通じて社会的リアリティの一部をなしてきたことを強調する。それは、現代のメディアにおいてニュース生産の構造化された一部をなしており、そこには共通の特徴的な傾向が表出されてきた。すなわち、スキャンダルには一方で儀礼化された一定のパターン、スケープゴートとなった人物の侮辱、謝罪、排除などの諸局面があり、他方でスキャンダルにはメディアが大衆の関心を集め、視聴率や販売部数を稼ぎ、自己の報道を正当化していく戦略的行為という特徴がある。著者の考えでは、このような両面性を持ったスキャンダルの日常化は、1970年代以降、メディアが日本人の生活の隅々に限なく浸透していった状況を前提にしている。

このメディアとスキャンダルの持ちつ持たれつを分析するために、著者は新機能主義 (Neo Functionalism) の社会学理論に基づきながら、スキャンダルを「儀礼」と「戦略」が結合した社会的パフォーマンスとして把握する。スキャンダルへの関心は、日常生活に関心を向けた現象学的社会学やメディアイベント論、あるいはメディアと政治の関係に焦点化した一部の政治社会学に広く見られ、著者はこれらのスキャンダルをめぐる既存の社会学考察を幅広く検討している。

その上で、著者はデュルケームの社会学やヴィクター・ターナーの儀礼論を発展させて社会的パフォーマンスの社会学を展開してきたジェフリー・アレクサンダー (Jeffrey Alexander) の新機能主義社会学を最も重要な理論的支柱としていく。そうして著者は、①社会的ドラマないしは世俗儀礼、②メディアのルーティンないしはバイアスによる生産物、③枠づけられたメディアの語り (テキスト) の3つの面から戦後日本のスキャンダルにアプローチすることができるという立場を示していく。

第2章では、著者は西洋と日本での「スキャンダル」の語源と使用法の歴史をたどりつつ、スキャンダルが、①境界侵犯、②逸脱的行為、③メディアイベント化、④クライマックス (スティグマの生産) という4つの段階をたどっているという視点を示す。さらに第3章では、スキャンダルの儀礼的側面に焦点を当て、①告白ないし謝罪、②外部への排除、③再統合の3段階についての検討している。

第4章では、戦後日本のスキャンダルの歴史を概観している。著者によれば、戦後日本史を通じてほぼ継続的に繰り返されてきたのは政治家のスキャンダルである。政治家のスキャンダルでは、しばしば後援会、官僚、財界、検察、そして時には反社会的集団との結びつきが語られてきた。他方、著者はこの章で、スキャンダルの大衆的なメディアを通じた受容のされ方についても広く論じている。

以上の理論的、歴史的検討を踏まえ、第5章では、①「有名人 (Celebrity)」のスキャンダルとして酒井法子の覚醒剤使用をめぐるスキャンダル、②「政治家」のスキャンダルとして小沢一郎の西松建設との関係をめぐるスキャンダル、③「大企業」のスキャンダルとしてオリンパスの粉飾決算をめぐるス

キャンダルの3つを事例として取り上げ分析している。著者は、これらのいずれにおいても最初の境界侵犯に第二の劇的な出来事（酒井の逃走劇、小沢の裁判、オリンパスにおける外国人社長と日本人経営陣の衝突）が続いて生じており、この第二の出来事こそが最初の逸脱以上にスキャンダルの拡大にとって重要な機能を果たし、一連の出来事がメディアの語りとして商品化されていく契機となったこと示している。また儀礼のプロセスとしては、どの事例でも、スキャンダルの主人公が一定のスタイルで謝罪しつつ、やがて表舞台から排除され、社会が「浄化」されたという感覚を人々が得るというお決まりのパターンをたどってきたという。さらに、日刊紙、NHK、民放、週刊誌、インターネットは、スキャンダルの内容にかかわらずそれぞれのメディアに固有の反応をしていく傾向がある。

このように著者は述べ、スキャンダルが原因と結果が継起的に連なる一方向的な事象ではなく、異なるレベル、チャンネルが輻輳する重層的な事象であること、またそこには反復する儀礼としての側面と、メディア等によって手段的に仕掛けられていく戦略の側面があることを確認している。最後に著者は、戦後日本においてスキャンダルは、スペクタクル的に消費される商品であり、社会を変化させるよりも現状の秩序を再強化する退行的な儀礼として機能してきたことを強調している。

審査委員会では、委員全員が第二次予備審査論文に比べ、議論の論理的な一貫性が明確になり、個別の考察の見通しも良くなった点を評価した。その一方、一部の委員からは、論文全体がやや頭でっかちで、多くの先行理論が渉猟され、スキャンダルを人類学的、社会学的対象として考察する複数の理論モデルが示されているが、それらの理論が全体としてどのように結びついているのかの考察が必ずしも十全ではないとの指摘もあった。それらの理論相互の体系的な関係が統合的に把握されていたならば、スキャンダルの実証的な分析にもっと奥行きが出ていたであろうという指摘である。

他方、本論文は儀礼の人類学と新機能主義の社会学の両方を戦後日本のスキャンダルという新しい対象に適用したほぼ初めての論文であり、その面での独創性は高く評価された。同時に、そうした独創性を超え、理論自体をスキャンダルという事象から構築し直し、新しい理論的パラダイムを示すにはまだ足りない点もあるとの指摘もあった。すなわち、著者はスキャンダルが既存秩序を再強化する面を強調するが、スキャンダルが社会秩序を変容させていく面も重要で、その両面の分析に進む必要があるとの指摘である。著者は大きく「聖」と「俗」の二項対立の構図のなかでスキャンダルを捉えたが、そのような二項対立図式を超える理論の構築が望まれるのである。著者のメディア概念がやや一般的な把握にとどまり、スキャンダルをめぐるマスメディアとソーシャルメディアの違いも含め、個々のメディア形式の関係を分節化して捉えることで今後の発展が期待されるとの指摘もあった。

以上、本論文は事例分析での洞察の深さやメディアのより綿密な理解等の点で課題を残すものの、「スキャンダル」研究という新しい学問的領域を開拓し、多くの先行理論を丁寧に渉猟し、一定の実証的な分析を一貫した仕方でやりきった点は高く評価することができる。本論文の独創性や研究の将来性を総合的に見て、本審査委員会は、本論文が博士（学際情報学）の学位に相当するものと全員一致で判断した。